

# 地域日本語教育における学習者と 大学生のオンライン会話練習の試み

—令和2年度常葉大学地域交流・連携推進事業—

坂本勝信, 谷誠司, 山下浩一, 内山夕輝<sup>1</sup>, 河口美緒<sup>2</sup>

Online Conversation Practice Between Japanese Language Students and  
Students in Regional Japanese Education  
— the Project for the Promotion of Community Exchange and Collaboration  
at Tokoha University in 2020 —

SAKAMOTO Masanobu, TANI Seiji, YAMASHITA Koichi,  
UCHIYAMA Yuki<sup>1</sup>, KAWAGUCHI Mio<sup>2</sup>

2020年11月6日受理

## 抄 録

本稿は、令和2年度に常葉大学からの補助金を受けて実施した、公益財団法人浜松国際交流協会との地域交流・連携推進事業における活動の1つ「オンライン会話練習」に関する報告である。本活動は、コロナ禍で対面による会話の授業が困難になった同協会日本語クラス学習者の会話力養成をいかに担保するかを端緒に、本学との連携推進事業を生かしてスタートしたものである。同協会日本語クラス学習者と本学の学生が3か月にわたって実施した、Zoom利用の会話練習の成果と課題を、学習者・本学学生・日本語教室の教職員等に対するアンケート調査及び、本学学生作成の感想文の分析などを通して、報告する。学習者は「参加前後の気持ち・考え方の変化」「日本語力向上」について総じて高く評価していた。また、大学生は日本語教師の視点だけでなく、外国人を「同じ住民」として捉えており、「互いに住みやすい街づくり」や「やさしい日本語」の重要性への言及が見られた。

キーワード：地域交流・連携推進事業 オンライン会話練習 地域日本語教室  
多文化共生 やさしい日本語

### 1. はじめに

執筆者ら（坂本・山下・谷）は、平成30年度に続き、令和2年度も常葉大学地域

<sup>1</sup> 公益財団法人 浜松国際交流協会 主幹

<sup>2</sup> 公益財団法人 浜松国際交流協会 事業コーディネーター

交流・連携推進事業（採択テーマ：多文化共生<sup>3</sup> 社会実現に資する外国人住民への支援及び、日本人住民の意識涵養事業）の補助金を受けた。連携先は、公益財団法人浜松国際交流協会（以下、「HICE」）である。

浜松市には2020年10月1日現在25,387人の外国人住民（89国・地域）がおり、在留外国人の全人口に占める割合は、3.2%<sup>4</sup>である。この割合は、全国平均の2.3%を大きく上回っている<sup>5</sup>。HICEは、多文化共生社会の推進を目的とした浜松市の外郭団体で、38年の歴史を有する。また、HICEは、市の委託を受けて浜松市外国人学習支援センター（以下「U-ToC」）にて日本語教室を開講しており、約100人の外国人を対象に日本語教育を行っている（2019年度実績）。2016年以来、事業代表者の坂本がそのアドバイザーを務めていることから、クラス運営に必要な日本人との交流活動に本学大学生の参加を促してきており、多文化共生の意識涵養を試みてきた。

令和2年度の本事業では、平成30年度の本学の地域交流連携事業<sup>6</sup>及び、翌年度の活動成果を発展的に継続する目的で数本の対面による交流活動を計画し、主目的として以下の3つを掲げた。

- 1) 生活者としての外国人の日本社会へのスムーズな適応を促すこと
- 2) 常葉大学学生の多文化共生の意識を涵養すること
- 3) 多文化共生社会実現に向け、日本人住民の意識向上を図ること

しかしながら、2020年初頭から広がり始めた新型コロナウイルス感染症の影響により、当初予定していた対面による活動計画を大きく変更せざるを得なくなった。活動変更の詳細は紙幅の関係で割愛するが、変更の一つが、U-ToCの対面による会話練習を、本学学生<sup>7</sup>などとの会話交流という形でオンラインにて実施するというものである（具体的には、3-3参照）。

本稿では、このオンライン会話練習の成果と課題を、活動に参加した、U-ToC学習者・With U-Net日本語ボランティア・本学学生・U-ToC教職員へのアンケート調査結果及び、本学学生作成の感想文の分析などを通して、報告する。

## 2. オンライン授業をめぐる社会の考え方

### 2.1. 文部科学省の授業実施方法（対面・遠隔）に関する考え方

文部科学省の資料6「大学等における新型コロナウイルス感染症への対応状況について」によると、5月時点で全面的遠隔授業の大学等は約9割（778校／890校）に上っ

<sup>3</sup> 総務省（2006）の『多文化共生の推進に関する研究会報告書』では、多文化共生を「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と定義している。

<sup>4</sup> 小数点以下は、四捨五入した（以下同じ）。

<sup>5</sup> 浜松市の数値は住民台帳による。また、全国については、在留外国人は法務省による2019年末の、日本の総人口は総務省による2000年5月1日のデータを基に算出した。

<sup>6</sup> 当該事業の成果は、「平成30年度常葉大学地域交流・連携推進事業『多文化共生に資する日本人住民と外国人住民の交流事業』の報告」として、常葉大学外国語学部紀要第36号、pp.133-156に掲載されている。

<sup>7</sup> 本事業へは、U-ToC学習者7名（定期的参加者）、本学学生9名（経営学部2名・外国語学部7名）、With U-Net日本語教師3名・ボランティア10名が関わった。

ていたが、7月1日時点では、約24%（254校／1069校）に減じ、約6割（642校／1079校）が対面と遠隔授業の併用へと変化したということである。

同省は、令和2年度後期や令和3年度の授業の実施方法の考え方を、7月27日に各大学等に対して周知を行い、その中で、「コロナ禍の中でも、感染対策を講じつつ、学生が納得できる質の高い教育の提供が不可欠」として、「主に教室等において対面にて授業を行うことを想定している」と述べている。

その他、遠隔授業<sup>8</sup>に関しては、

地域の感染状況や、教室の規模・受講者数・教育効果等を総合考慮し、今年度の授業の実施状況や学生の状況・希望等も踏まえつつ、感染対策を講じた上での面接授業の実施が適切と判断されるものについては面接授業の実施を検討していたきたいこと。遠隔授業を実施する場合にも、面接授業との併用を検討いただきたいこと。

と述べている。

## 2.2. 日本語教育学会社会啓発委員会作成の動画「オンラインと日本語教育」

公益社団法人日本語教育学会の社会啓発委員会は、日本語教育の社会的課題について、視聴者の理解を深め、主体的判断ができるようになることを支援する目的で動画を作成し、YouTubeにて公開している<sup>9</sup>。2020年8月公開の動画は、「オンラインと日本語教育」とのテーマで同委員会の委員5名がオンライントークをする様子を収録したものである。トークは、「オンライン日本語教育を実施した感想」、「オンライン授業の成功例」、「対面に戻った後のオンラインの可能性」の順になされた。以下、最初に2つのトークから、大きくメリット、デメリットについて、動画画面上の表示及び、発言内容を要約して、箇条書きにて記す。

<メリット>

- ・教員が壇上に立ち、学習者が聞くというレイアウトでなく、フラットな関係性の空間ができる。
- ・ディスカッションなどの授業がやりやすく、想像以上に学生も発言しやすい。教室だったら、気後れしてしまい、みんなの前で話すのに抵抗がある学生もオンラインでフラットにやると<sup>10</sup>、大変発言がしやすいと学生からの声もある。
- ・Zoomのブレイクアウトルームのペアワークは、二人だけの世界で話せる場を提供できる。

<sup>8</sup> 国立情報学研究所では、2000年3月から「4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム」をオンラインにて20回開催している。同研究所のホームページで様々な遠隔授業の取り組みに関する発表資料を読むことができる。

<sup>9</sup> 「発言は、委員個人の見解であり、日本語教育学会の公式見解ではありません」との断りがある。

<sup>10</sup> 自分の周りに実際に人がいる教室環境でなく、画面上に顔が並ぶ状態を指すものと思われる。

- 授業中にプライベートチャット機能を利用し、学生が気づいたことを教師に投げかけ、教師が全体にシェアするなどコミュニケーションチャンネルが増えた。
- 教室に来られない学習者が一堂に会して授業ができる。
- 乱入する音も面白い。また、後ろの背景に色々なものが映っていて、それをネタに会話が弾む。
- 自分の身の回りのものが使える。たとえば、「これは、最近私が買ったノートです」など、今日の前にあるものを活用できる。
- 学習者の生活が垣間見える。洗濯物が干してあるなどもいい雰囲気を作ることに繋がる。
- 授業への出席率が上がった（90%から95%へ）。多様な状態・状況で授業が受けられる。
- 学習者が自主的に自分たちで、授業外でテーマを決めて話をするような、オンライン学習コミュニティを作った。その様子をビデオに撮って、YouTubeで公開していた。
- Zoomですぐレコーディングが出来て、その後YouTubeなどに出るなど、授業録画と再視聴が容易になり、学習者が見直すようになった。対面授業のみより支援の手立てが増えた。
- オーラルの口頭試験を録画することにより、同僚間で評価のすり合わせができるようになった。
- 録画については、教師の中にも抵抗感を持つ人もいるが、回線の調子が悪いなどで参加できなかった人のためにも協力を依頼している。通常、1週間で消すようにしている。

#### <デメリット>

- 著作権対応と試験対応（カンニング対策など）が難しい。
- 試験のカンニングを避けるために、言語知識を問うタイプの評価から、辞書の使用を認めた作文など、パフォーマンス評価へと変える工夫が必要だった。
- インターネット環境が不安定な学生への対応が課題である。
- 録画をすることに抵抗感を感じる学生もいる（学生の同意を得ることは必要）。
- 共有した録画が外部に出てしまう可能性は否定しきれない。

### 3. 地域連携交流事業におけるオンライン会話練習

#### 3.1.HICEにおける地域在住外国人のための日本語学習支援の位置づけ

U-ToCは2010年1月に浜松市が開設した公営施設である。浜松市外国人学習支援センターの名の通り、外国人の学習を支援する場であり、主な事業として日本語教室が開催されている。HICEはU-ToCが開設されて以来、事業運営の委託を受けており、年間を通じて「日本語教室」「日本語ボランティア養成講座」「多文化体験講座」「地域日本語学習支援」「次世代育成事業」に取り組んでいる。

浜松市は、U-ToC を外国人市民の学習支援の拠点として位置づけている（地域日本語教育推進方針、浜松市、2020）が、その立地や開館日時の事情から課題も多く指摘されている。建物も予算も行政が用意した公的な施設での学習支援事業の運営は安定した環境で事業に注力できる一方、他都市に類を見ない「地域に在住する外国人」の学習支援に特化した施設のため、その内容については試行錯誤の連続であった。これまで HICE は U-ToC での外国人市民向け日本語学習支援を充実させるために、文化庁「生活者としての外国人」のための日本語教育事業を 2007 年度より、10 年連続計 11 年度間（うち 1 年度は周年記念事業のため申請せず）採択を受け、その都度直面する課題に対応してきた<sup>11</sup>。委託事業の実施にあたっては、育んできたネットワークを用いて、様々な機関（大学、企業、NPO、外国人学校等）と連携し行った実績がある。

U-ToC 開設以来の 10 年間、連携機関との対話を進めながら、年度毎の課題解決や振り返り、改善に取り組んできたが、日本社会に大きな影響のあった有事（東日本大震災や新型コロナウイルス感染症拡大）を経験するたびに、外国人市民が日本経済の枠組みの中で最も早く影響を受ける立場に置かれていることを、U-ToC 日本語教室への学習申込人数で知ることとなる。HICE は通常の業務に加え、地域に在住する外国人のために、その時にできる最善の日本語学習支援を、待ったなしで対応しなければならないという使命も抱えている。

以下、2020 年度コロナ禍の中で始まった日本語教室オンラインクラスについて述べる。有事対応としての緊急措置ではあったが、常葉大学との連携で実施できたことは非常に有意義であり、今後の With コロナにおける日本語教室の開催手法として検証するに値するものとなったと思われる。

### 3.2. U-ToC 日本語教室

U-ToC の日本語教室は、浜松市に在住もしくは在勤、在学しており、中長期滞在が可能な身分系の在留資格（「日本人の配偶者等」「永住者」「永住者の配偶者等」「定住者」）を持つ外国人市民を対象としている。今年度は初級クラスと読み書きクラスの 2 教室を開催しており、受講料は無料、託児サービスも無料で行っている。初級クラスは、月曜から金曜まで午前中に開講し、日常生活において最低限必要な日本語を学ぶ、言語保障としての特徴を持っている。初級クラスの授業は、日本語教師の資格を持つ教師と教室補助者による一斉授業となっている。読み書きクラスは、火曜と木曜の午後に開講し、日本語教師、日本語ボランティアが小グループに分かれ、ひらがなカタカナ、漢字、多読といった学習者の読み書きレベルに応じた学習支援をしている。U-ToC の日本語教室に関わる教師、ボランティアは With U-Net というグループに登録し、ボランティアは原則、U-ToC の日本語ボランティア養成講座を修了した方としている。

<sup>11</sup> 内容の詳細については、文化庁の HP を参照されたい。 [https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo\\_nihongo/kyoiku/seikatsusha/](https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/seikatsusha/)

### 3.3. オンライン会話練習を実施した経緯

令和2年度 U-ToC 第1期初級クラスは、4月13日から10月1日まで、平日週5回（3時間/回・全107回）の開講を予定していた。初級クラスの内容は、前半がひらがなカタカナと初級テキスト『できる日本語（初級）』、後半がプロジェクトワークと日本語能力試験 N4 対策とする予定だった。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、4月14日に初級クラスの開講を一時延期することが決定した。だが、感染症拡大の影響で失職もしくは勤務待機中の学習者も多く、彼らの日本語学習を継続するために、延期の期間中は宿題支援を実施することとなった。同時に、日本語教師と HICE 職員間でオンライン授業を検討し、5月19日からひらがなカタカナのオンライン授業を開始した。

緊急事態宣言の解除に伴い、対面授業の再開が決まり、6月1日から初級テキストの授業を開始することが決定した。感染症予防のため、初級クラスは学習者を2グループに分け、授業時間を3時間から1時間30分に変更しての再開となった。授業時間が半減したことにより、第1期初級クラスでは後半のプロジェクトワークと日本語能力試験 N4 対策の実施を取りやめることとなった。対面授業を実施するにあたっては、徹底した感染症予防対策を講じた。教室活動は、接触や飛沫での感染を防ぐため、他者と密接するようなグループワーク、会話練習を極力控えることとなった。

しかし、日本語学習において会話練習は極めて重要な活動である。学習者の中には日本人との接点が無く、日本語教室以外で日本語を話さないという方も少なくない。そのため、初級クラスの学習者が日本語で会話をする、語り合うことができるような活動ができないかと検討した結果、オンラインで会話練習をする「話読聞書（わどくぶんしょ）クラス」（以下、オンラインクラス）を実施することとなった。

### 3.4. オンラインクラスの内容

「話読聞書」は、初級クラスで使用しているテキスト『できる日本語（初級）』の中にあるコーナーで、「人と楽しく話すために、自分のことや自分の経験を日本語でどうやって話すかを考え、固まりで話す練習」<sup>12</sup> をすることをねらいとしている。同テキストは、全15課で構成され、各課に「話読聞書」がある。初級クラスで終了した課の「話読聞書」をその週のオンラインクラスで取り上げるようスケジュールを組んだ。

オンラインクラスは、6月5日（金）から9月25日（金）まで、毎週金曜の午後（1時間/回）、全15回の開講となった。第1期初級クラスの学習者を対象とし、日本語教師1名、ボランティア7名、HICE 職員1名が毎回参加した。会話パートナーとしてのボランティアは、6月の全4回は U-ToC の学習者に接し慣れている With U-Net から、7月から9月までの全11回は常葉大学の学生から募集した。With U-Net からは10人、常葉大学の学生からは9人<sup>13</sup> の応募があり、どちらも各回7人

<sup>12</sup> 嶋田和子（監修）『できる日本語教材開発プロジェクト（著）（2011）「できる日本語初級教え方ガイド&イラストデータ CD-ROM」アルク、p19

<sup>13</sup> 本学学生は、経営学部2名（2年生、4年生）、外国語学部7名（2年生、3年生）が参加した。

程度になるよう配置した。日本語教師は3名が持ち回りでオンラインクラスの授業を担当した。

学習者は、午前中 U-ToC で初級クラス（対面）を受講し、午後にオンライン会議システム「Zoom」を使い自宅等からオンラインクラスに参加した。午後は求職活動や子どもの送迎などの予定がある方もいたため、オンラインクラスへの参加は任意とした。参加した学習者の国籍は、ブラジル、ペルー、フィリピン、中国、ベトナム、ネパール、インド、韓国の8か国で、延べ101人の参加があった。

オンラインクラスでは、HICE 職員が Zoom ミーティングのホストとなり、日本語教師を共同ホストとして設定した。クラスが始まる10分前に、教師と会話パートナーはミーティングルームに入室し、事前打ち合わせを行った。教師からその日のテーマ、既習事項などの説明があり、会話パートナーから質問があればそれに答えた。授業開始時には、ビデオやマイクの動作確認のために出欠を取った。その後、日本語教師が写真やイラストを見せるなどしてテーマを共有し、そのテーマに関してどのような質問ができるのかを確認した。教師から会話パートナーに質問をして、そのやりとりを聞くこともあった。テーマの共有後は、学習者1、2名につき、会話パートナー1、2名が付くようにブレイクアートルームを割り振った。ブレイクアウトセッションの時間は8分から10分程度で設定し、その時間中は教師と HICE 職員が、ブレイクアートルームを順に見て回り様子を確認した。ブレイクアートルームでは、会話パートナーと学習者が導入で確認した質問をすところから会話を始め、その日のテーマを語り合った。

1回目のブレイクアウトセッション終了後は、教師が学習者と会話パートナーのペアを指名し、どのような会話をしたのか再現したり、学習者を指名しブレイクアウトセッションで話した内容をひとりで語ったりするなど、クラス全員で話題を共有した。その後は、メンバーを変えて2回目のブレイクアウトセッションを実施した。2回目のブレイクアウトセッションでは、1回目で話した内容をより詳しく話したり、1回目のブレイクアウトセッションで会話パートナーから学習者へ質問することが多かった場合は、役割を変えて学習者から会話パートナーに質問したりするなどした。2回目のブレイクアウト終了後は、教師が学習者を指名し、ひとりずつその日何を話したか発表した。

## 4. 報告

### 4.1. アンケート・感想文について

9月の最終授業終了直後に、活動の振り返りを目的として、①学習者7名及び、会話パートナーとしてのオンライン授業参加者（② With U-Net ボランティア10名・③常葉大学学生9名）、④ U-ToC 教職員4名にアンケート調査を実施した。

また、アンケートは、対象者に応じ、3種（①用、②③用、④用）用意したが、対象者間で比較が可能なように、①と②③の設問と選択肢を、一定の割合で同じ内容とした。なお、学習者用アンケートは、学習者の母語（英語、ポルトガル語、ベトナム

語)に翻訳したものを、中国語母語話者用のみやさしい日本語で記載のものにて回答してもらった<sup>14</sup>。

加えて、大学生には、参加体験の内省を促し、今後の学びに繋げるために、感想文を提出してもらった。

## 4.2. アンケートから見えるもの(結果・考察)

### 4.2.1. 学習者と日本人会話パートナーのアンケート結果(共通項目)

4.1で述べたように、アンケートの設問及び、選択肢は、学習者と日本人会話パートナー間で共通項目があるが、主なものを表1にまとめた。番号1~6(以下「設問A群」)は、「会話練習に「参加前」と「参加後」で気持ちや考えにどんな変化がありましたか(「改めてそう感じた」場合も含む)」で、番号7~11(以下「設問B」)は「会話練習のどんな点がうまくいったと思いますか」、番号12・13(以下「設問C」)は『『オンライン』のメリット・デメリットをどう感じましたか』である。各選択肢の上段は、日本人向けアンケート、下段の「( )」は、学習者向けのやさしい日本語での表記であり、両者は同じ内容を表している。また、選択肢の右側には、学習者と日本人(全体・ボランティア・大学生)の内訳を記してある。そして、対象者が丸を付した割合が、50%を超えた選択肢には実数の右肩に「\*」を、70%以上の場合、「\*\*」を記した<sup>15</sup>。

以下、特徴的だと思われることを述べる。

まず、設問Aは、参加前後の気持ち・考え方の変化を問うているが、学習者は全ての選択肢について○を付した回答者が5割を超えており、この点が、日本人会話パートナーと比較して顕著で、オンライン会話練習参加により、多くに肯定的な変化があったことがわかる。7名中6名以上が「そうだ」と回答したのは、「国が違うことは問題ないと思った」「日本人と話すのは楽しいと思った」であった。一方、日本人は、傾向として大学生のほうがボランティアより肯定的変化の割合が高く、特に、「外国人に親近感がわいた」は、対照的な回答となった(大学生9人中8名、ボランティア10名中3名)。全15回の会話練習のうち、ボランティアは最大4回(6月)、大学生は最大11回(7月~9月)の参加と、交流の回数に差があることもその理由として考えられる。

次に、設問Bは、主に会話練習の効果に関するものだが、設問Aと同様に、全体的に学習者のほうが効果を感じていることが読み取れる。全対象者にほぼ共通し、多かったのは、「学習者に発言の機会をたくさん与えられた(話すチャンスが多かった)」であり、コロナ禍にあって、対面では難しい「話す」活動をオンラインに切り替えた意味があったと言える。番号8「会話力」、番号9「聴解力」は、言語教育の効果に関わるものである。テストをしたわけではないので、主観的な自己・他者評価ではあるが、効果を実感した学習者は、全7名中前者が4名、後者が5名であった。一方、日

<sup>14</sup> 中国語母語話者用やさしい日本語バージョンをベースに、英語、ポルトガル語、ベトナム語に翻訳した。

<sup>15</sup> 小数点以下は、四捨五入した。



本人は、学習者比べて、「そう思う」割合が低い。上述したように、全 15 回の会話練習のうち、ボランティアは、最大 4 回、大学生は、最大 11 回の参加と限定的であったため、より参加回数が多かった学習者のほうが能力の伸びを実感したのかもしれない。

最後に、設問 C は、「オンライン」のメリット・デメリットに関するものである<sup>16</sup>。設問 C に関しては、対象者間に似た傾向が観察された。設問 A・B で肯定的な評価が多かった学習者であっても、オンラインを対面と変わらない会話練習ができるとは捉えておらず、半数以上が、教室で対面にて行ったほうがよいと感じたようである。

表 1 全対象者に共通する設問

設問	番号	選択肢	学習者	日本人		
			7 名	全体 19 名	ボラ 10 名	大学生 9 名
A	1	外国人との会話に慣れた (日本人と会話をするのが大丈夫になった)	5**	7	2	5*
	2	外国人も日本人も違いはないと思えた (国が違うことは問題ないと思った)	6**	6	2	4
	3	外国人に親近感がわいた (日本人はだいたい友達と同じだと思った)	5**	11*	3	8**
	4	外国人と付き合うのは楽しい (日本人と話すのは楽しいと思った)	7**	12*	5*	7**
	5	外国人を「共に社会を創っていく住民」と捉えられた (日本人と一緒にいい浜松市を作りたいと思った)	5**	9	5*	4
	6	外国人を「知る機会」の重要性に気づいた (日本人のことを知るチャンスは大切だと思った)	5**	9	4	5*
B	7	学習者に発言の機会をたくさん与えられた (話すチャンスが多かった)	7**	15**	6*	9**
	8	学習者の会話力が上がった (会話が上手になった)	4*	8	3	5*
	9	学習者の聴解力が上がった (聞き取り listening がよくなった)	5**	4	2	2
	10	学習者の疑問点が明らかにする場であった (日本・日本人のことがわかった)	4*	3	2	1

<sup>16</sup> wifi 環境に関する選択肢も用意してあったが、学習者用のやさしい日本語での記述内容と、日本人会話パートナー用の内容にやらずれが生じていたため、今回は報告を見送った。

	11	学習者と自分の関係性が深まった (日本人といい関係になった)	4*	7	2	5*
C	12	(オンラインは) 対面とほぼ変わらない会話練習ができた (教室のクラスと同じで、いい会話練習ができた)	3	3	2	1
	13	(オンラインは) 対面よりコミュニケーションに支障がある (オンラインより教室で会って話したほうがよかった)	4*	4	2	2

※丸を付した割合が、50%を超えた選択肢には「\*」を、70%以上の場合、「\*\*」を記した。たとえば、番号2「外国人も日本人も違いはないと思えた(国が違うことは問題ないと思っただ)」は、学習者の場合、7名中6名と86%で、70%以上であったので、「6\*\*」となっている。

#### 4.2.2. 感想文から見えるもの

感想文には、参加して、学んだこと・役にたったこと・気づいたこと・難しかったこと・疑問点・提案などを書くよう指示した。以下、1)「多方向の学び」、2) 教師としての視点、3) 学習者の特徴、4) オンライン、5) やさしい日本語、6) 多文化共生、7) 提案、8) その他の8つのカテゴリーに分けて順番に紹介し、考察を加える。なお、一つ一つの感想の冒頭に「( )」にて内容の見出しを記した。また、考察では、4.2.1の、「対象者間に共通する設問・選択肢」以外の回答及び、U-ToC 教職員の回答、全対象者の自由記述欄から適宜引用して述べる。

##### 1) 「多方向の学び」

- (学習者からの学び) 学習者さんに国のことを教えてもらって、日本では当たり前だと思っていたことに、新たな発見が生まれて楽しかったです。(中略) 学習者さんたちから、マッサージの料金やタクシーの値段など、実際の国でかかる値段を聞いたのですが、日本の物価は学習者さんの国と比べるとやはり高いな、と改めて思いました。(学生 I)
- (学習者・大学生間のお互いの学び) 英語を母語としている学習者の方と会話している際に「日本語では～。英語では～といいます。」と英語を教えていただくこともしばしばありました。学習者の方々は日本語を学ぶ場として、私たち学生は日本語を教えるか学ぶ場、海外出身の方の文化や行動を学ぶ場として、お互いの能力を高められたのではないかと感じます。(学生 C)
- (U-ToC 教師からの学び) 先生方の、授業の復習の仕方や、学生とのやり取り、話すテンポ、パワーポイントの使用方法、写真を使って分かりやすくお手本を見せたりする事など、いかにして学習者に理解してもらえるようにするのか、とても学ぶ

ことが多かったです。(学生 F)

- (他の大学生からの学び) 私は経営学部で外国人と接する機会がなく、知識もなかったため初めはなかなか上手く話を進めることができませんでしたが、日本語教師を目指す大学生が多く参加していたので、一緒にお話しをする大学生からも質問の仕方や話の広げ方を学ぶことができました。(学生 B)

以上から、本活動への参加を通し、得た「学び」は多方向で、オンラインで集うすべての対象者が、大学生に対する「与え手」になる環境だったようである。「互いの学び」という観点では、U-ToC 教職員も「テキストに沿った口頭練習とは異なり、学習者自身のことばで生活を語るという活動が、学習者と学生さん双方に良い影響があった」と述べており、学びの方向性を多様にする場であったことがわかる。

## 2) 教師としての視点

- (個々に合わせた対応の重要性) 中国出身の方には漢字を使って日本語を教えさせていただくことができたり、伝わらない言葉は様々な言い方をして理解してもらったりといった、学習者の方ひとりひとりに対応する大切さを学びました。(学生 C)
- (話の引き出し方・意図の汲み取り) 学習者の発話をただ待っているだけでなく、学習者にたくさんお話してもらうために、話をどう聞き出した方がいいのかを考えることや、何を伝えようとしているのかをこちら側でくみ取ることが大切であると学びました。(学生 F)
- (話の引き出し方) (前略) 写真や絵、ジェスチャーなどを使うとより多くの話を学習者から引き出すことができ (中略)、既存の教材のみを使うのではなく、それを踏まえた上で学習者に写真を用意させたり、教師が提示することで話が膨らむと同時に、理解力も上がることがわかりました。(学生 D)
- (会話クラスで重要なこと) 会話クラスを通して気づいたことは、ただ作文を書くために会話をするのではなく、テーマは決まっても同じ時間を楽しみながら共有することが大切なのではないか、ということです。楽しいからこそ、モチベーションが上がり、もっと話したいと思うし、話したいことがたくさん出てきて話せるようになりたいと思える。そんな正のループを生み出せるのではないかと (学生 D)
- (タイムマネジメント) 回を重ねるごとに会話が弾むようになり、時間が足りなくなってしまうこともありました。以前のミーティングでもブレイクアウトルームの時間が短くて会話が途中で終わってしまう、ことが話にでたので時間配分にも気を使うべきだったと思いました。せっかく学習者が日本語でたくさんお話をしてくださっているので、最後まできちんと話を聞く事が出来るようにしたかったです。(学

生B)

- (部屋全体で会話を作る) 会話クラス後半のブレイクアウトルームでは、「誰かと誰かの話」ではなく、「部屋全体で会話をつくる」ということを意識して行いました。そのようにすることで、学習者が2名以上いる場合や他に大学生がいる場合でも楽しんでお話しすることができたので、勉強になりました。(学生D)

以上から、大学生たちは、本活動は、「教室外の日常会話」ではなく、「語学教育における会話練習」と位置づけられていることを正しく認識した上で、日本語教師として配慮・重視すべき点への気づきを得ていることが読み取れる。さらに、学習へのモチベーションと会話力の向上には、「同じ時間を楽しみながら共有する」ことが重要ではないかとの思いに至る学生もおり、本活動への参加は、単なる会話指導のスキル習得という枠に留まらない学びをもたらしたようである。

### 3) 学習者の特徴

- (日本人より詳しい日本の身近な生活) 私があまりカード類は持たないので、ポイントカードに詳しくはなかったのですが、学習者の皆さんの中には利用している人が多く、カードの作り方や利用方法、利用場所までも私に教えてくれました。日本人の私よりも詳しく知っていたので、驚いたのと同時に、学校で習っていることだけが勉強なのではなく、日本で生活していく中で身に付けている知識もたくさんあり、日常生活の中から吸収しているものも多いのだと分かりました。(学生E)
- (こなれた日本語：留学生との違い) 学習者が話をする時の口調は、私が今まで接したことのある外国人留学生と比べて、ネイティブの口調に近い話し方をしていると感じました。それはやはり留学で日本に滞在し、教科書の日本語を学んでいる留学生とは異なり、日本に住んで生活をするための日本語を学び、それを日本での生活でネイティブの日本人と関わりながら使っていくことで、定着しているのではないかと思います。(学生E)
- (人生経験や語彙の豊かさ：留学生との違い) (前略) いつも関わっている留学生とは違うと感じたことがいくつかありました。日本でキャリアを積んだり家庭を持っていたり人生経験が豊富な方が多く、ご自身の話やご家族の話をたくさんしてくださいました。また、日本で長く生活している方も多く、語彙がとても豊富でした。(学生G)

以上のように、大学生は、普段接する機会のある留学生との比較において、U-ToC学習者の「ネイティブの口調に近い話し方」「語彙の豊かさ」「人生経験の豊かさ」などを挙げている。地域日本語教室の学習者にとっては、日本語クラス外の時間が生活の中心であり、また、教師以外の日本人から自然で大量な日本語のインプットを得る

機会が多いと思われる。それが生活に密着した語彙やカジュアルな話し言葉などを身に付ける要因の一つだろうことに気づきを得ている様子が窺われる。

#### 4) オンライン

- (様々な場所からリラックスして参加) 学習者が楽しんでいる。という点が挙げられます。「勉強している」というような雰囲気ではなく、外出しながらだったり、食べながらだったり、気軽にリラックスしながら楽しく学んでいるような印象を受けました。オンラインだからこそできることではありますが、緊張せずにリラックスして学ぶことができ良かったと思います。(学生 D)
- (普通の授業では見られない一面) 学習者の方々が、お家や自分の好きなところから話すことが出来るのはリラックスできる環境が作られていて良いと思いましたし、家族が近くにいる事で、普通の授業では見れない一面をうかがうことが出来たのではないかと感じました。(学生 F)
- (Wifi の不安定さ) 学習者が話してくれている時に通信が悪くなり音声が進まったり、学習者がどんな表情をしているのか見えなかったり、というようなことが何度かありました。そうしたときに、学習者を不安にさせないよう、通信が悪い主旨を伝えましたが、どこから聞こえなかったのか、という確認からしないといけなくなり、手間取ってしまいました。(学生 D)
- (タイムラグ) オンラインでの会話練習のために、会話でのタイムラグが生じること (学生 G)

以上から、オンラインのメリット・デメリット両方を感じたことがわかる。メリットとして、「外出しながら」「好きな場所で」「食べながら」など、教室でないからこそ可能な「リラックスして学べる」点を挙げている。また、「教室ではわからない学習者の一面が見られる」もオンラインならではのだろう。デメリットは、一般的によく指摘される Wi-Fi 環境やタイムラグに関するものであった<sup>17</sup>。

#### 5) やさしい日本語<sup>18</sup>

- (やさしい日本語の難しさと重要性) 学習者の方々とお話をさせていただいている中では、やはり、使用する日本語が難しく、伝わらない部分や、分かりにくくなっ

<sup>17</sup> オンラインに関しては、大学生以外のアンケート回答者からも様々な意見が聞かれた。メリットとして、「他の日本人の視線や発言を気にせずに活動に集中できた」(大学生・ボランティアの約半数: 選択式アンケート)、デメリットとして、「授業展開の仕方(流れがワンパターン、1人もしくは1ペアが話している間の待たされる感など)に課題を感じた」(U-ToC 教職員: 自由記述)との記述もあった。

<sup>18</sup> 文化庁(2020)は、「やさしい日本語は、難しい言葉を言い換えるなど、相手に配慮したわかりやすい日本語のことです」としている。

てしまう部分があり、困惑させてしまうこともありました。どのように言葉を変えて伝えれば理解してもらえるのかを考えながらお話を進めていくことは難しかったですが、やさしい日本語の大切さを改めて感じました。(学生 F)

- (伝え方の重要性)「やさしい日本語」は語彙の面だけでなく伝え方の面も含まれる。(中略)会話練習に参加する前は、「やさしい日本語を使う＝簡単な語彙と文法を使って伝えること」という認識をしていました。しかし実際に話してみると、それだけでは足りないことがわかりました。どういった順番で話を進めるか、という文章構成力(中略)も重要であることがわかりました。(学生 D)
- (語彙調整ゆえのデメリット) 同じ教科書で教えているため、(中略)、既習の文型で伝えようとしてしまった為、時々日常会話的でなくなってしまうこともあり、反省しています。そして語彙操作が働いてしまったが故に、私との会話からあまり新しい表現を学ぶことはできなかったのではないかと、思います。(学生 I)
- (不自然な日本語) 自分自身が間違った日本語を使わないように気をつけながら話したことが裏目に出て、不自然な日本語になってしまうこともあるとわかり、正しく、簡単で、不自然でない日本語を使うことを意識して話すことに難しいと感じました。(学生 D)

以上から、単にやさしい日本語の重要さに気づくだけではなく、捉えなおし(「話す順番」など伝え方も含む)をしたり、語彙コントロールをするがゆえの学びの減少や不自然さが伴う、といったデメリットの可能性にも言及している。やさしい日本語は、「災害時」「観光」「報道」「教育」など様々な場面で必要とされているが、「教育」においてはいつでもだれに対しても、同じように簡単に、わかりやすくすればいいわけではない。学習者のレベルや言語習得のしやすさの観点から調整・配慮しなければならない点に気づいたのは大きな収穫であると考えられる。

## 6) 多文化共生

- (外国人の印象や見方の変化) 私はこの交流を通して、外国の方々への印象だったり見方がガラリと変化しました。今まで、外国人の方達と関わる機会はなく、言葉の壁から避けていた部分がありました。なので、初めて Zoom で対面する時は、緊張と不安でいっぱいでした。しかし、いざとなって話してみると一生懸命こちらに言葉を伝えようとしてくれる姿勢やこちらの話を理解しようとしてくれる姿などを見ていると、緊張や不安はなくなって、私もどうにかベアになった方に話を伝えたいと思い(後略)(学生 A)
- (苦手意識の消滅) 初めは正直言葉の通じないことから少し苦手意識を持っていま

したが、今ではむしろたくさん関わっていきたいと思うほど外国の方の印象が変わりました。(学生 A)

- (名前や顔を覚えること) この交流を通して1番嬉しかったことは、皆さんに顔と名前を覚えて頂けたことです。Zoomでペアになると「また一緒だね」と言ってくれたり、私の名前をたくさん呼んでくれたりして、とても嬉しかったです。(学生 A)
- (互いに住みやすい関係) これから日本で外国人の方が困っていたら気軽に声をかけるようにして、お互いが住みやすいと思えるような関係になってほしいと思います。(学生 B)
- (誰もが住みやすい街づくり) これまで日本語教師になりたいと思い勉強してきましたが、実際に学習者の方とお話をする機会をいただき、日本語教師だけでなく様々な場面で日本に住む海外出身の方々や日本に興味のある方々の力になりたいと考えることができました。実際に私の住む地域では、外国籍の方が多く割には日本語を勉強できるような環境が整っていなかったり、町の看板も日本語表記だけのものが多かったりするので、これからの多文化共生のために大学で学んだ知識を使い、誰にでも住みやすい街づくりをする活動をしていきたいと考えることができました。(学生 C)
- (人として寄せる思い) 毎回、〇〇さんは～～が好きだと言っていたから、〇〇さんとペアになったらこの話をしようかな、と考えるのが楽しかったです。日常の中でも、例えば父がスイカを食べているのを見て、Aさんがスイカが好きだと言っていたのを思い出したり、友達と海へ行ったときに、Bさんはよく海へ行くと言っていたのを思い出したり、といった風にふとした瞬間に学習者さんのことを考えていたりしていました。普段授業をしている時は、学習者さん同士が会話しているところを見守ることが多いので、学習者さんたちとの会話の時間はとても新鮮でした。(学生 I)

以上の「印象や見方の変化」「苦手意識の消滅」は、定期的に話すという機会がもたらしたと言えるだろう。4.2.1の表1にもあるように、半数以上の大学生が「外国人を『知る機会』の重要性に気づいた」としていた。まずは互いを「知る」ことから、正しい理解や親近感が生まれるのではないかと思われる。また、「互いに住みやすい街づくりを」との感想は「多文化共生」の意識涵養につながる大切なワードであると考えられる。

## 7) 提案

- (テーマ選定の配慮) 趣味や食べ物、おすすめの場所の話は特に学習者の関心が高

い印象がありました。それらをテーマに会話をすれば、日常生活でも使える単語やフレーズが多く、学習者自身が関心を持っていることについて話すため、事前に話したい内容や分からない語彙を調べるようになり、より自ら学習する姿勢ができるのではないかと思います。(学生 E)

- (学習者によるテーマ選択) 難しい内容だと外国人の方が少し困っているように感じました。そのため、テーマをいくつかあげて、学習者にどれを話したいか選んでもらうようにしたら、もう少し興味を持って意欲的に参加してくれるのではないかなと思いました。(学生 B)
- (学習意欲の促し) 授業をしていく中で、学習者の方々の出席率がどうしても低いことがあり、U-ToCの先生方もその件について悩まれていました。(中略) 学習者の方全員に合わせることは大変ですが、それぞれの目標にあった授業内容や課題を課すことが日本語を習得する上で大切になってきます。また学習者の方の自律性も大切になってくると思うので、日本語を指導することにプラスして学習者の学習意欲も育てていくことが大切なのではないかと感じました。(学生 C)
- (一人ひとりとの対話時間) 授業内で日本人学生が1人で学習者の方が2人で会話をする場面にあたって、結構時間が足りないことが多く、まだまだ学習者の方がお話ししたいという様子が度々見受けられましたので、もう少し長い時間一人ひとりとお話できたら良かったのかなと思いました。(学生 F)
- (料理の中継) (前略) 出身の国の食べ物について話す回があると楽しいのではないかと思います。学習者さんたちはアジアや南アメリカなどいろいろな国から来ていました。また、自宅から接続する人がほとんどでした。日本のほとんどの家にはキッチンがありますので、実際に作っているところを中継したり、どう作るのかを食材を見せながら説明したりするとより想像しやすく、その国について親近感がわくのではないかと思います。同じ国の出身者でも、出身地域が違くと料理が違ってくるかと思うので、地域性の違いを日本人も楽しめるのではないかなと思いました。(学生 G)
- (手紙交換) 学生との手紙交換をしたら書くことについてのモチベーションにつながったり、手書きの文字への親近感もわいたりするのではないのかと思いました。実際にポストに投函してもよいとは思いますが、時間がかかったり個人情報の問題があったりする場合はPDFで送り合い、印刷すると手軽にできるかと思います。(学生 G)

以上を見ると、学習者の興味関心に働きかけ、学習意欲やモチベーション向上につ



なげたい意図がわかるもの（テーマ）、オンラインを生かしたアイデア（料理）、参加者の関係性を深めるための手法（手紙交換）など、色々な角度からの提案がなされたことがわかる。

## 8) その他

- （日本語教師への思いの深化）以前から私は将来、日本語教師になりたいという夢がありましたが、このオンライン会話練習で学習者と会話をする中で多くのことを学び、日本語教師の大切さや、やりがいを実感し、改めて日本語教師になりたいという思いが強くなりました。本当に貴重な体験をすることができる良い機会を頂けたと思います。ここで学んだことを活かして、これから日本語教師になるための学びにさらに力を入れたいと思います。（学生 E）
- （学習者の意欲の高さに刺激）何よりも驚いたことが、学習者の意欲の高さです。ブレイクアウトルームで学習者の方と直接話をする際に、私から質問をしなくても、学習者の方たちは積極的に自分のことについて話をしてくれて、私のことについてもたくさん聞いてくれました。母語を使わず、外国語だけで会話することでさえ難しい環境にも関わらず、分かる日本語を使って一生懸命伝えようとしてくれる姿にいつも感動していました。私がオンラインで外国の先生と英語で会話をした時は、自分から話すことがあまりできなかつたので、本当に学習意欲の高さを感じたし、その積極性を私自身も見習わなくてはいけないと感じました。（学生 H）
- （絆）オンラインクラスが昨日で終わってしまったことは、とても寂しいです。オンライン上でしたが、短い期間の中で、大きな「絆」が芽生えたと感じています。このような形で皆さんと出会えて本当に良かったです。（学生 H）

以上から、本活動が、自身の日本語教師への夢、語学学習への取り組み姿勢を見つめなおす契機にまた、学習者と関係を構築する場となっていたことが読み取れる。

## 5. オンライン会話練習の活動成果と課題

### 5.1. 国際交流協会・日本語教室主催の立場から

オンラインクラスに参加した学習者は、同国人と結婚し、勤務先も外国人従業員ばかりだったという方や、子どもが幼稚園に通っているの日本人保護者と親しくなりたいという方など、日本人と接することに慣れていない方が多かった。オンラインクラスでは回を重ねるにつれ、参加者が同じ顔触れとなっていき、次第に学習者と学生が打ち解けていく様子が見られた。

学習者は、リラックスした情意フィルターの低い状態で日本語を話すことができ、既習事項の運用練習だけでなく、自分が話したいことを臆せず話すことができる場を持つことができた。型にはまった口頭練習ではなく、自身に関する真の情報を日本人

相手にリアルなコミュニケーションの中で語る機会を持てたことは、今回のオンラインクラスの成果のひとつだと考える。また、趣味や思い出、学生生活など、学生からもたらされる様々な話題から、学習者は日本社会を知り、日本人への理解を深めることができた。

また、オンラインクラスでは、会話パートナーとして、自分自身が話し過ぎない、自分の日本語が伝わっているか確認するなど、学生の学習者に対する配慮が感じられた。学生の中には日本語教員過程を履修している方が複数人いることも関係しているのかもしれない。その素養を身に付けることができるように、U-ToCの日本語ボランティア養成講座の内容も再検討を進めたい。

U-ToCの日本語教師は、学習者が教師、教室補助者以外の日本人と話す学習者の姿を見ることができ、学習者がどのように日本語を運用しているのかを知ることができた。また、会話練習を目的としたオンラインの一斉授業が初めてだった方もおり、オンラインクラスではその知見を得ることができた。そして、会話パートナーに授業計画や活動の意図を伝えることは、自らの授業を見直す機会となった。

運営側となるHICEも、初めて会話練習を目的としたオンラインクラスを実施する機会を持つことができ、機材などの環境面、オンライン授業の内容面、オンラインクラス参加前後の学習者の日本語能力の検証不足など、事業展開を見据えた運営面など、課題を浮かび上がらせることができた。オンラインクラスの振り返りと感想では、学生から学習者に話したいことを聞きテーマに取り入れるのはどうか、動画を活用するのはどうかなど、建設的な意見をいただいた。今回の試みから得た学びをもとに、オンライン教室の事業化や、学生、大学と協働での事業展開を引き続き検討していきたい。

## 5.2. 研究者・大学側の立場から

3.3で述べたように、U-ToCでは、6月1日より開始した初級クラス（対面）において「会話練習」の実施を控えた。今回のオンライン会話練習は、その代替的な活動である。学習者の参加は任意とはいえ、授業の一環であることから、本学の学生には授業に関わる者または、日本語教育を学ぶ者として、語学教育的な役割を果たさなければとの意識があったと思われる<sup>19</sup>。感想文に「発話の引き出し方」「学習者個々に合わせた対応」「会話クラスで重要なこと」「タイムマネジメント」など、教師としての視点に係る記述が多かったことからそれが窺えた。また、4.2.2で紹介した「(前略)ただ作文を書くために会話をするのではなく、テーマは決まっても同じ時間を楽しみながら共有することが大切なのではないか(中略)。楽しいからこそ、モチベーションが上がり、もっと話したいと思うし、話したいことがたくさん出てきて話せるようになりたいと思える。そんな正のループを生み出せるのではないか」(学生I)という感想は、大変重要な気づきである。教師養成課程の受講生は、教授スキルの獲

<sup>19</sup> 本学の参加者9名のうち7名の外国語学部生は、程度の差はあるが、日本語教師養成課程の科目を受講しており、日本語教師を目指すものもいる。

得や誤用へのフィードバック方法などに興味関心が向きがちである。しかし、学習動機に関する観点から言語教育を捉えようとする学生がいたことから、今回の活動への参加は、新たなビリーフ<sup>20</sup>を獲得する機会でもあったと推察される。

一方で、本活動を通して、大学生たちは、一人の人として学習者に接し、親近感を感じて、友達に心を寄せるような気持ちになったことが窺える。4.2.2でも紹介したが、ふとした瞬間に「日常の中でも、例えば父がスイカを食べているのを見て、Aさんがスイカが好きだと言っていたのを思い出したり、友達と海へ行ったときに、Bさんはよく海へ行くと言っていたのを思い出したり」（学生I）し、「短い期間の中で、大きな『絆』が芽生えた」（学生H）とも述べている。「人と人」の関係が構築できたのも本活動の成果の一つではないだろうか。

また、4.2.2で述べたが、活動期間中に、ポイントカードの使い方を学習者のほうがよく知っており、学生に使用方法を教える場面があった。これらを通して、学習者が地域に根差し生活していることを学生は実感することとなった。ともに地域社会で暮らす学習者の姿を学生が知ることは、多文化共生社会の推進に寄与するきっかけになると考えられる。

ここで学習者の声を紹介したい。学習者（全7名）に対する選択式のアンケートでは、「もっと日本語を勉強したくなった（6名）」「日本語の勉強が楽しくなった（6名）」「日本の生活は大丈夫だと思うことができた（6名）」など、学習への意欲向上や日本で生活する自信に繋がる回答が目立った。さらに、自由記述欄には、「みんなわかりやすい日本語で話してくれた。とても楽しかった。日本人学生と話す経験ができてとてもうれしい。日本人の大学生は会話パートナーとしてすばらしかったし、かわいかった」「はじめはとてもはずかしいと思っていましたが、大学生のみなさんがとてもやさしく、がんばって話せるよう励ましてくれました。日本人との会話が以前より楽になったと思います。」など、大学生に対する肯定的な感想も多く見られた。これらの声を大学生に届け、今後の学業や交流活動への取り組みの励みとしてもらえればと考えている。

最後に、課題を1点挙げる。本活動に参加した学生が得た貴重な体験を、大学の他の学生たちに共有する機会が持っていないことである。オンライン会話練習は、正規の授業ではなく、課外活動の一つであるため、難しい面もあるが、外国人住民を「知る」ことを通して得た知見を、同じ夢を抱く大学生たちに参加者から直接伝えることは、学習動機を高め、外国人への心理的な距離を縮める契機にもなり得る。今後は、そのような場を設けていきたい。

## 6. オンライン会話練習の成果と今後の展開

オンライン会話練習への参加により、本学の学生は、語学教育における「オンライン」のメリット・デメリットが理解できただけでなく、「多方向の学び」から「教師

<sup>20</sup>『新版日本語教育事典』では、言語学習についてのビリーフを「言語学習の方法・効果などについて人が自覚的または無自覚的にもっている信念や確信」(p.807)としている。

としての視点」を身に付けるとともに、その視点により、授業の改善策を「提案」できる力をつけた。また、地域日本語教育に通う「学習者の特徴」を知り、「やさしい日本語」の重要性に気づくなど、「多文化共生」の意識を涵養する機会ともなったと感じている。

一方で、今回は、会話パートナーとして関わったため、日本語教育の専門性を生かして、「日本語を教える」体験ができたとまでは言えない。常葉大学地域交流・連携推進事業（採択テーマ：多文化共生社会実現に資する外国人住民への支援及び、日本人住民の意識涵養事業）の研究期間は6か月残っている（令和3年3月まで）。そこで、「教育実習」を一つの目的とした新たな活動を、HICEとの連携で10月にスタートさせた。浜松市天竜地区の日本語教室において、地域在住の外国人に日本語の授業を試してみようというものである。本活動にも経営学部・外国語学部所属の学生計8名が参加しており、今後さらに、学びを深めていく予定である。

### 謝辞

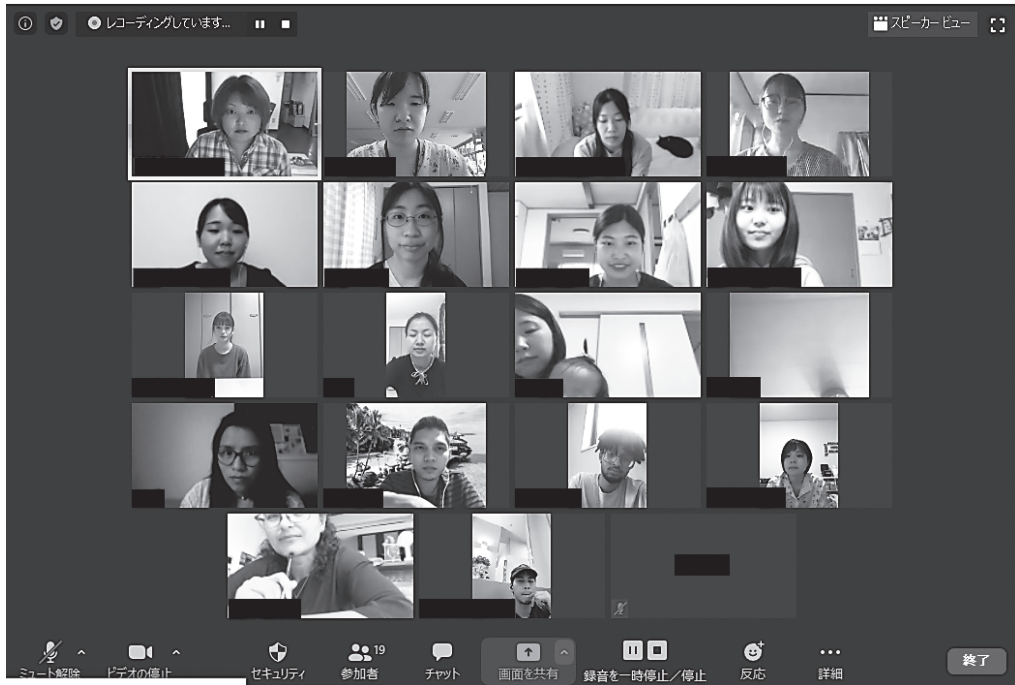
本活動への参加機会を提供くださった HICE と、ご指導いただいた教職員の皆様、オンライン会話練習に先に取り組み、引き継いでくださった With U-Net ボランティアの方々、そして、楽しい時間を大学生と過ごしてくださった学習者の皆様に感謝申し上げます。本研究は、令和2年度常葉大学地域交流・連携推進事業補助金の採択を受けたものです。

### 参考文献

- 国立情報学研究所「4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム」<<https://www.nii.ac.jp/event/other/decs/>>（2020年11月3日閲覧）
- 嶋田和子（監）（2011）『できる日本語初級 本冊』アルク
- 日本語教育学会（2005）『新版日本語教育事典』大修館書店
- 総務省『多文化共生の推進に関する研究会報告書 2006』  
<[https://www.soumu.go.jp/main\\_content/000539195.pdf](https://www.soumu.go.jp/main_content/000539195.pdf)>（2020年11月2日閲覧）
- 日本語教育学会（2020年）「オンラインと日本語教育」 NKG TALKERS' TABLE “N子の部屋” 公益社団法人日本語教育学会社会啓発委員会  
<<https://www.youtube.com/watch?v=nIVQlWZ6Spg>>（2020年11月2日閲覧）
- 文化庁（2020年）『在留支援のためのやさしい日本語ガイドライン』  
<[https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo\\_nihongo/kyoiku/pdf/92484001\\_01.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/pdf/92484001_01.pdf)>（2020年11月3日閲覧）
- 文部科学省（2020年）「大学等における新型コロナウイルス感染症への対応状況について」  
<[https://www.mext.go.jp/content/20200917-mxt\\_koutou01-000009971\\_14.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200917-mxt_koutou01-000009971_14.pdf)>（2020年11月3日閲覧）

資料

オンライン会話練習前の顔合わせ時の様子（写真）



オンライン会話練習（ブレイクアウトセッション）の様子1（写真）



オンライン会話練習（ブレイクアウトセッション）の様子2（写真）

